

# 北海道の外来魚～ニジマス、ブラウトラウトそしてヤマメの場合～

長谷川 功<sup>こう</sup>（水産研究・教育機構 水産資源研究所 さけます部門）

冷涼な気候で水も冷たい北海道では、サケ科魚類が川の生き物の主役です。サケやサクラマスの産卵遡上は、札幌のような大都市でも簡単に観察できますし、イワナやヤマメ（サクラマスの河川残留型<sup>かせんざんりゅうがた</sup>）達にもあちこちの川でごく普通に出会えます。そんな北海道の川に、主に釣り目的で外国原産のニジマスやブラウトラウトが放されました。彼らは（国外）外来魚と呼ばれ、競争・交雑・食う－食われるの関係などの種間関係<sup>しゅかんかんけい</sup>を通じて北海道にもともといた魚（在来魚<sup>ざいらいぎょ</sup>）を減らしてしまうと考えられてきました。たしかに実際に調べてみると、外来魚が入った後、イワナが減った川がありました。でも、ヤマメはイワナほどには減っていません。一言で種間関係<sup>しゅかんかんけい</sup>といっても、どのような結果になるかは様々なようです。最近では、人の手によって放されたヤマメの影響も心配されています。もともといなかった川に放されたヤマメは（国内）外来魚<sup>こくない がいらいしゅ</sup>で、国外外来魚<sup>こくがいがいらいしゅ</sup>と同じような問題を起こすかもしれませんし、もともとヤマメがいる川に別の川のヤマメを放すと交雑<sup>こうざつ</sup>によって、ヤマメの性質（海へ行く魚の割合など）が変わることもあり得ます。外来魚は絶対<sup>がいらいぎょ</sup>にいてはいけない、とまでは言いません。でも、外来魚の影響<sup>がいらいぎょ</sup>で在来魚<sup>ざいらいぎょ</sup>がいなくなることは避けたいですし、釣りなどで外来魚<sup>がいらいぎょ</sup>を利用する場合は、彼らの影響を理解しておくことが大事ではないでしょうか。



ブラウトラウト（ヨーロッパ原産）